

音楽的感受を高める教材の開発 —大学との連携を通して—

嶋見 靖之* 1

The Development of Teaching Materials to Improve Musical Sensibilities

Yasuyuki SHIMAMI

目 次

- 0. はじめに
- 1. 教材開発の視点と実際, 考察
 - 1-1 教材開発の視点
 - 1-2 大学との連携
 - 1-3 「語感を生かした混声合唱の味わい(2年)」の実践
 - 1-4 「わたしが選んだ日本の歌(1年)」の実践
 - 1-5 「踊りとリコーダー(1年)」の実践
- 2. おわりに

0. はじめに

わたしたちは、表したいイメージや感情を音楽を通して表現するとき、何らかの音楽の要素の働きを生かして表現している。その働きが発揮されるように、音楽の要素(以下「要素」と記す)を観点に表現の仕方を設定することを、「表現を工夫する」と言っている。

この要素の働きは、様々な経験の中で感受されている。よく「表現の工夫」という行為をするときは、経験を基にしていることが多い。

そんな状況にある生徒に、要素の働きを意図的に感受させることによって、その働きは生徒により実感される。そのような実感が促された生徒が、要素を観点に表現方法を設定し音で表現すると、働きによって表したいイメージや感情が表現できることに納得することができる。このような生徒には、要素を観点に表現方法を設定しようとする意欲が喚起され、表現を工夫していく姿が見られるようになる。そして、表現を工

夫することによって、表したいイメージや感情がより表現されるようになったとき、目標が達成された喜びや、よりよい表現ができるようになった喜びが実感される。さらに、音楽の要素の働きの面白さに気づき、さらに音楽をより深く聴いたり、表現をより工夫したりする意欲が喚起される。

このような考え方⁽¹⁾に立ったとき、より効果的に感受を促す方が必要となる。

本研究では、より効果的に感受を促す教材を開発して授業の中に位置付けることの有効性を、生徒の様相を通して明らかにする。併せて、開発に際して大学との連携を視野に入れることの有効性も明らかにする。

1. 教材開発の視点と実際, 考察

1-1 教材開発の視点

音楽的感受は、聴くことによって促され、感受された働きを生かして表現し、自己評価したり他者の反応を確かめたりすることで、その働きに納得する。その納得は感受をさらに強いものにする、と考えられる。

しかし、音楽を聴いて何らかの感情が呼び起こされ

2005年2月28日受理

* 1 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校教諭

ているときには、複数の要素の働きが調和して、聴き手に働き掛けていると考える。ある曲を聴いて「悲しい感じ」がするのは、例えば、テンポが遅いためであり、コーラアンブレで演奏されているからでもあり、短調であるからでもあり、和音進行のせいでもあり…といった複数の要素の働きが互いに調和し補完し合っていて働いたためと考える。このとき、それぞれの要素の働きには注目しないで聴いている。この状況では、一つの要素がもつ働きについてよく分からないことになる。

そこで、ある一つの要素を観点として、違う表現方法の設定をした演奏を聴くようにすると、感じが違うことが実感され、その要素の働きが感受されることにつながると考えた。また、比較して聴けるようにすると、違いが明確になると考えた。

そこで、次の点から教材制作や教材提示を行おうと考えた。

- (1) 一つの要素だけから表現方法を変え、他の要素については変えない。
- (2) 違った複数の演奏を続けて提示し、比べて聴くように指示する。(比較聴取)

1-2 大学との連携

教材制作の視点として挙げた「一つの要素だけから表現方法を変え、他の要素については変えない」ことを具現するためには、既製の演奏ではなく、意図的な演奏が必要である。そして、聴き手の関心を高めるためには、演奏の音質に高さが求められる。

これらのことを可能にするためには、専門にしている人に演奏を依頼することが考えられる。そこで、新潟大学教育人間科学部芸術環境講座で音楽を専門に学んでいる大学生の協力を得ることにした。協力を得る流れは次の通りである。

- (1) 大学音楽科の先生に、授業の意図や教材制作の意図を説明し、大学生を募集してもらう。
- (2) 募集に応じた大学生に、演奏の趣旨と意図を説明する。必要に応じて、意図をくんだ表現方法を考えてきてもらう。
- (3) 比較聴取をしたら明らかに違いが分かるようになるまで、何度も演奏を収録する。

また、保健体育など、音楽以外を専門に学んでいる大学生にも、必要に応じて協力を得た。

1-3 「語感を生かした混声合唱の味わい(2年)の実践⁽²⁾

(1) 授業のねらいと教材制作

本題材では、歌詞を構成する言葉のもつイメージや感情をとらえ、それにあった表現を追求する面白さを実感できたり、その表現を通して言葉のもつイメージや感情をより明確に自分の内面と結び付けることができたりすることをねらっている。

教材である「春に」【図1】の詩には、イメージが膨らむ表現や言葉の語感をとらえる面白さを味わうことのできる表現が随所にある。また、楽曲は詩のもつイメージや感情を豊かに表現しており、詩と曲の一体感をとらえることができる。



【図1 「春に」の楽譜の一部】

そこで、音楽科の学生による合唱団を編成し、曲中の「枝の先のふくらんだ新芽が心をつつく」について、子音を強調した演奏と強調していない演奏を収録した。

(2) 授業の実際

ある生徒は、自分たちで演奏した録音を聴いた後、子音を強調していない大学生の演奏を聴いて、「全体的にまとまった感じができてきれいだった。強弱を付けたりして、曲の感じをよく出している。」とワークシートに書き留めた。その後、子音を強調した演奏を聴いて、前述の生徒は、「聴いていて、すごく打たれる感じがする。言葉がはっきりしている。」とワークシートに書き留めた。全体には、「表現が豊かになった」とか「強弱が付いた」という記述が多かった。

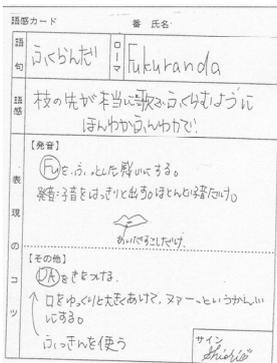
この後、演奏をした大学生のインタビューの映像を提示した。【表1】

私は、ここの場所(枝の先の…)を歌うときに、今まではのびのび自由に歌っているのですが、ここにくるとイメージが変わって、枝の先の小さな新芽をイメージするので、ただ普通に歌って小さくして「枝の先の…」といったら、それは小さくなるんですけど、自分のイメージしているものに近づこうとするために、自分の体もこわばるのではないのですがこう小さくなって、気持ちも新芽に話しかけるように、そっと、自分の体が小さくなって新芽と

同じ感じになって話しかけるような感じで歌います。

【表1 インタビューでの話の一部】

このインタビューを視聴した後、大学生の演奏を映像付きで試聴した。前述の生徒は、「気持ちを表情で表して、マユ毛をびくびくさせている。また、発音をきれいにするために、口を大きく開けて歌っている」と気付いたことをワークシートに書き留めた。このように、39人中34人の生徒が（以下、34/39人と記す）歌詞にかかわることを記述し、31/39人の生徒は映像から表情や体の動きが変わることを記述した。



【表2 発音追求カード】

この後、語感をとらえてみたい言葉を選び、そのイメージを明らかにしたり、発音の仕方を演奏のビデオを見たり自分で試したりして追求した。【表2】そして、合唱を仕上げていった。

(3) 考察

以上のことから、生徒は詩に着目して歌うことの実感することができたと判断する。また、ワークシートの記述内容の分析から、詩から感じ取ったイメージを顔の表情や口の開け方、体の動きで表現することができるということが分かったと判断する。

この題材に入ったとき、ある生徒は、「よく聴いた曲だし、なんといっても詩がいいと思った。うまくなりたい」と、楽曲に対する関心の高さが伺える記述をワークシートに残している。この関心の高さと、比較聴取によって、発音を工夫すると演奏の感じが変わることへの納得が、追求を進める意欲につながったものと考えられる。

1-4 「わたしが選んだ日本の歌（1年）」の実践⁽³⁾

(1) 授業のねらいと教材制作

本題材では、昔から歌い継がれてなじみのある日本の童謡や唱歌に込められた思いや情景を、強弱などの諸要素の働きを生かして歌っていく。そのために、授業においては、生徒が曲ができた背景を追求することで、曲に込められた思いや情景に納得したり、表現の工夫の観点となる要素の働きを実感した

りすることを大切にする。

強弱の働きへの実感を促すために「シャボン玉」を取り上げ、演奏の比較聴取ができるようにした。具体的には、強弱の変化を付けない演奏と、「しゃぼん玉消えた…」から弱く歌う演奏を、声楽を専攻する大学生に歌ってもらい、収録して、生徒に提示した。

(2) 授業の実際

生徒は、まず「演奏の感じ」「演奏の仕方」の2つの観点から2種類の「シャボン玉」の演奏を聴き比べて、気付いたことや感じたことをワークシートに書き留めた。強弱の変化を付けた演奏を聴いて、生徒は演奏の感じについて「淋しい感じ」「悲しい感じ」と発言した。また、演奏の仕方について「強弱」「音の区切り」「響き」「ゆったり」といった諸要素に着目したと考えられる発言をした。

この後、生徒は「演奏の感じ」と「要素」のつながりを線で結んだり、演奏の違いが生まれた原因をワークシートに書き留めた。ある生徒は「シャボン玉を飛ばしているときは楽しいと思っていて、シャボン玉が消えたときにはきっと悲しいと感じているはずだから歌詞の意味を考えて、強弱や音に陰を付けたんだと思う」と述べた。このように、38/38人の生徒が、演奏の感じを感情を表す言葉で、演奏の違いを強弱などの要素を観点に記述することができた。そして、演奏の感じと要素を線で結ぶことや演奏の違いが生まれた理由について記述することができた。

次に、生徒はこの曲についてのエピソードを授業者から聞いた。【表3】

一説に、雨情は、病で急死した愛児をいとおしみ、その悲しみからこの詩を書き記したといわれています。鎮魂の心がこもっているとすれば、この曲のイメージは一変してしまうのです。

【表3 授業者が話したエピソード⁽⁴⁾】

このエピソードを聞き、実際に2連目である「シャボン玉消えた…」から弱く歌った後、ある生徒は「今までは1番も2番も同じテンポや音色や強弱で歌っていたので明るく楽しい曲というイメージがあるが、今回1番を強く、2番を弱く歌ってみたら、今まで思っていたシャボン玉のイメージがなくなつてさみしい曲のイメージになった。同じ曲でも歌い

方が違くと曲のイメージまで変わることにはびっくりした。」と述べた。このように、24/3 1人の生徒がイメージや感情を強弱などの要素に着目して表現できることへの驚きや善さを記述した。

この後、生徒は「赤とんぼ」「砂山」「ふるさと」「小さい秋見つけた」「花の街」の中から1曲を選び表したいイメージや感情が表現できるよう強弱などの要素から歌い方を設定した。そして、設定した歌い方で歌えるように追求した。

(3) 考察

2つの演奏を比較聴取し、観点を決めて違いを述べることにより、生徒は、演奏の感性的側面と構造的側面を明らかにし、2つの側面のつながりを明らかにすることができたと考える。また、曲の背景を知ることにより、曲のもつ感情が明確にすることができた。以上のことから、強弱などの要素に着目して表現の仕方を工夫して歌うことが、感情を表すことにより結び付くことに気付かせることができた。

1-5 「踊りとリコーダー（1年）」の実践⁽⁵⁾

(1) 授業のねらいと教材制作

本題材では、リコーダーを使って自分のイメージを表現する活動を通して、イメージした踊りの動きにあったテンポを設定したり、音の長さを組み合わせていく。そして、二重奏する活動を通して、テンポや音色を合わせていく。授業においては、テンポや音の長さの組み合わせには踊りの動きを表現できる働きがあることが実感できたり、表現する楽しさが実感できたりすることを大切にする。また、仲間と一緒に演奏して和音を作り出す楽しさが実感できることを大切にする。

教材「メヌエット」は、3拍子の踊りのために作られた曲である。このことから、「弾む動き、はねる動き、動きの停止」「流れる動き、まわる動き」といった、イメージした踊りの動きをそれぞれテヌートとスタッカートを組み合わせて表現することができる曲である。【譜例2】

さらに、テンポや音の長さの働きの感受をより深めるために、音楽と映像のつながりが実感できる教材を制作する。具体的には、保健体育科のダンスを専攻している大学生に、演奏に合った振り付けを考えてもらい、実際に踊っている様子を映像として収録し、生徒に提示する。大学生は、振り付けのほかに、音楽の特徴がより表れるような衣装を選ん

でいた。



【譜例2 メヌエットの楽譜】

(2) 授業の実際

最初に、テヌートだけの演奏【譜例3】とテヌートとスタッカートを組み合わせた演奏【譜例4】を比較聴取した。



【譜例3】

【譜例4】

そして、それぞれの演奏についてイメージした踊りの感じや具体的なステップの様子を記述した。また、違うように聞こえた原因を記述した。ある生徒は「B（譜例4）の方は一つ一つにスタッカートがあって、A（譜例3）はスタッカートをあまり使っていないか違って聞こえた」と述べた。このように、全員の生徒が音の長さが違うことが原因で演奏が違うと判断した。

その後、2つの演奏に合わせて大学生が踊った映像を音を消した状態で見た。そして、踊りが前に聴いた演奏のどちらを基にしているかを選んだ。前述の生徒は、前の踊りはBの演奏と選び「前の演奏は映像と一緒に聴くと、音と一緒に弾んでいて面白かった。後の演奏はBと同じで音に合っていて、やはり、音の一つ一つで雰囲気が変わるものだなと思った」と述べた。



【図4 踊りの様子(左が譜例3, 右が譜例4に対応)】

次に、モデラートの演奏とアレグロの演奏を比較聴取した。そして、演奏の特徴とイメージした踊り

の感じや体の動きを記述した。そして、演奏の特徴とイメージした踊りの感じや体の動きを記述した。その後、2つの演奏に合わせて大学生が踊った映像を音を消した状態で見た。そして、踊りが前に聴いた演奏のどちらかを基にしているかを選んだ。全員が演奏と踊りを一致させて選んだ。

以上の活動を終えて、前述の生徒は、「音にスタッカートをつけると飛び跳ねている感じ、音を精一杯のばすと、スラーって感じがする。速いテンポは走っていそうな、飛んでいきそうな感じ、ゆっくりなテンポはウォーキングしていそうな、草原で小鳥と踊っていそうな感じ」と述べた。このように、全員の生徒が、動きと音の長さやテンポのつながりについて述べた。

この後、生徒はワークシートに「表したい踊りの動きや感じ」「設定したテンポ」「踊りで使うステップの動作と、その動作を表す音の長さ」「それぞれの音符の音の長さ、表したい動き」を書き込み、その通りに演奏できるよう、グループで追求した。

(3) 考察

「聴き比べから分かったこと」の記述から、生徒は、比較聴取の活動を通して音の長さの組み合わせやテンポの働きを感受していると判断する。また、映像を見ることで、具体的な動きとしてイメージを表すことができたと考える。

しかし、演奏の仕方を設定する際に、音の長さやテンポの両方に着目しようとした生徒は18/39人と少なかった。これまでの学習とのつながりに気付かなかつたためと考えられる。「ワークシートに記述したことを用いて、表したいイメージや動きと工夫することを書きなさい」といった明確な指示が必要だったと考える。

3. おわりに

以上の実践から、比較聴取の活動をより効果的に行うために、感受させたい要素の働きだけを変えた演奏や映像を制作し、提示することは有効であることが明らかになった。そして、意図を明確にして制作できるように大学と連携することが有効であることも明らかになった。

大学との連携については、附属学校の立場から推進することが容易であった。このことを公立学校で行うためには、大学と公立学校とのネットワーク作りが必

要と考える。

現在、新潟大学教育人間科学部音楽教育研究室が継続している「音楽教育研究会」といった事業は、公立学校への貢献としてだけでなく大学と教員、教員相互のネットワーク作りをねらったものである。また、公立学校の研修会に積極的に大学音楽科の先生を講師に招聘することも、同じことをねらっている。大学と公立現場の橋渡しをする附属学校教員の役割も大きい。細やかなネットワークを確立するためにどう取り組んだらよいか今後の課題である。

本実践研究を進めるに当たり、教育人間科学部伊野義博教授、大浦容子教授から貴重なご助言と激励をいただいた。また、伊野教授、滝澤かほる教授からは、大学生の協力体制を作っていたいただいた。授業実践に当たっては、下越教育事務所（現、神林村立西神納小学校長）柳原昌子指導主事及び研究協力者のみなさんからご指導ご助言をいただいた。そして、附属新潟中学校旧・現同人からは、常に授業案を検討いただき、貴重なご意見をいただいた。みなさんに感謝申し上げます。

- (1) 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校研究紀要第46集「学ぶ喜びを見いだしていく学校づくり」、2001年、61～63ページ
- (2) 平成13年度新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校教育研究発表会公開授業案、2002年、18～21ページ
- (3) 平成14年度新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校教育研究発表会公開授業案、2002年、18～21ページ
- (4) 佐野靖著「心に響く童謡・唱歌～世代をつなぐメッセージ～」、東洋館出版社、2000年、20ページ
- (5) 平成15年度新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校教育研究発表会公開授業案、2003年、37～42ページ